

感情認識能力における個人差測定を試み

伊藤 美加

はじめに

感情知性 (emotional intelligence) は、SaloveyとMayerによって「自分の感情を把握すること、適切に調整すること、利用することは知性の一部である」と発表された理論である (Salovey & Mayer, 1990)。その後、Golemanによりまとめられた著書 (邦題は「EQ—心の知能指数」) がベストセラーになったのをきっかけに、様々な分野から大きな関心がよせられるようになった。実際に、Handbook of emotional intelligence (2000)、Emotional intelligence in everyday life (2001) が出版されたり、Emotionの特集号 (2001) で取り挙げられたりしており、研究が蓄積されつつある。このような動向は、認知と感情の相互作用を積極的に理論化する試みの開始と符合する (吉川・伊藤, 2001参照)。

本研究では、感情知性を感情の認識能力として位置付けるという立場に立って、感情知性を測定する尺度を作成し、感情知性の構造や働きを検討することを目的とした。感情知性尺度と、人格特性や感情の認識に関わる認知課題との関係について検討するという展望のもとに作成した、自己報告式の質問紙尺度による研究の結果を報告する。まず、感情知性について概観した後、感情知性を測定する尺度の作成の試みを紹介し、今後の研究の方向性などについて論じることとする。

感情知性とは

感情知性の定義

能力 (ability) としての感情知性 Mayer, Caruso, and Salovey (2000) によれば、感情知性とは、様々な感情の意味やその関係を認識し、それらに基づいて推測したり問題解決したりする能力を指す。具体的には、感情を知覚・表出する能力 (perceiving and expressing emotion)、思考の助けとなるよう感情を同化する能力 (assimilating emotion in thought)、感情を理解する能力 (understanding emotions)、感情を思慮深く管理・調整する能力 (reflectively regulating emotions) の4領域からなると仮定されている。これを図示したものがFigure 1で、4ブランチモデル (four-branch model) と呼ばれる。階層性が仮定され、基本的なプロセスからより高いレベルの統合されたプロセスへと配置されている。

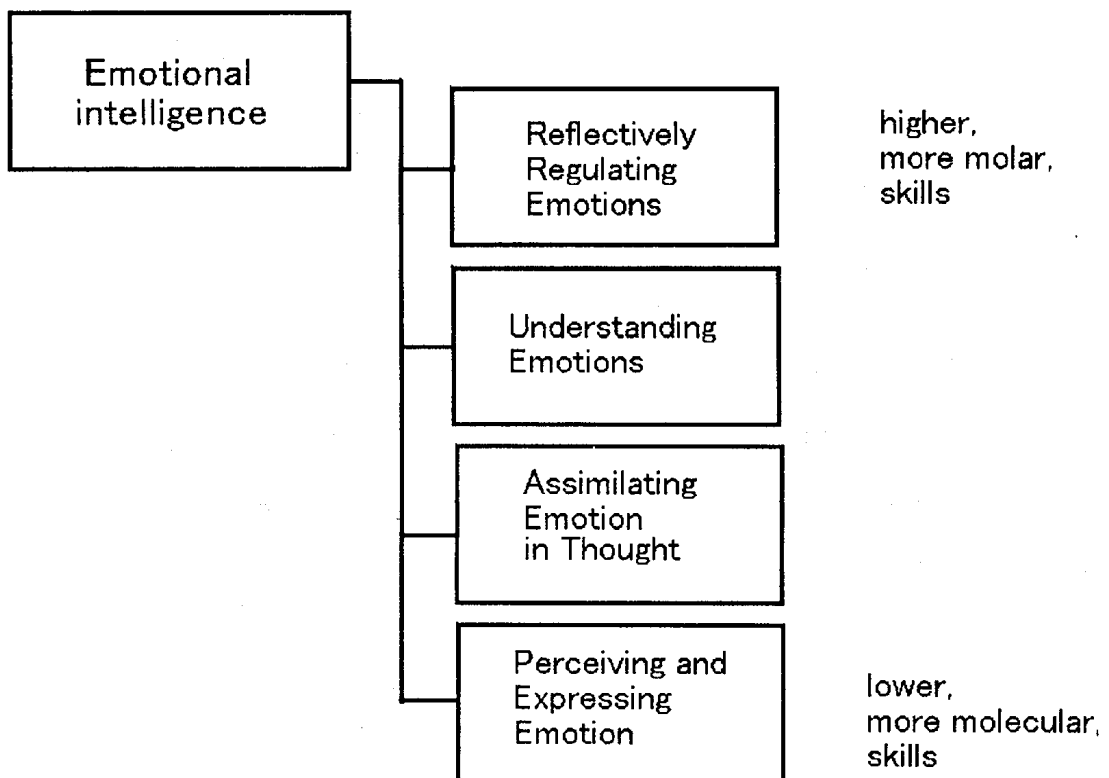


Figure 1 感情知性に含まれる4つの能力 (Mayer, Caruso, and Salovey (2000) を改変)

Mayer and Salovey (1993,1997) やMayer, Caruso, and Salovey (2000)、Mayer, Salovey, and Caruso (2000) によれば、これら4つの能力は、以下のようにまとめることができる。

感情を知覚・表出する能力は、最も低い水準の技能とされる。例えば、純粹な笑みと儀礼的な笑みとを区別する等、表情に表される感情を読み取ったり、音楽、絵画や写真等、芸術作品に描かれている感情を評価したり、多様な情報に含まれる感情的な内容を同定することを指す。

次の水準の、感情を同化する能力は、基本的な感情経験をイメージしたり、音や色、味に含まれる感覚を思い浮かべたり、意識して感情を心の中へ取り入れることである。

3番目の水準の、感情を理解する能力は、例えば、怒りは正義が否定されたときに生じる、恐怖が過ぎ去ると安堵感が生まれるなど、特定の感情がどのようなときに生起するのか、複雑な感情はどの感情が組み合わさったものなのか、ある感情から別の感情へどのように変化するのか、様々な感情の特性や法則を知っていることである。

感情を管理・調整する能力は、4番目の最も高い水準の技能とされる。例えば、怒りを感じた後にその感情をなだめるといった、特定の感情や衝動をモニターしかつ抑制しようとするやり方を知っていること、不安やいらいらを振り払うことができることを指す。

特性 (trait) としての感情知性 このような感情知性の能力型アプローチ (Mayer & Salovey, 1997; Mayer, Caruso, & Salovey, 2000) に対して、感情知性に伴う人格特性を含む混在型アプローチ (Bar-On, 2000; Goleman, 1995) がある (Mayer, 2001)。

例えばBar-On (2000) は、成功する人とそうでない人がいるのはなぜかという疑問に答えるために、人生における成功と関係する人格特性を吟味し、内的スキル (intrapersonal skills)、対人関係スキル (interpersonal skills)、適応度 (adaptability scales)、ストレス制御 (stress-management scales)、全般的気分 (general mood)、の5領域に含まれる15の人格特性を特定した。

また、Goleman (1995) によれば、感情知性は、自分の感情を知る (knowing one's emotions)、感情を制御する (management emotions)、自分にやる気を起こさせる (motivating oneself)、他者の感情を認識する (recognizing emotions in others)、人間関係をうまく処理する (handling relationships) の5つの要素からなり、各要素に複数の人格特性が含まれるという。

感情知性の特徴

われわれの能力はIQに代表されるような知的能力に限定されるのではない。他にも多くの種類の能力がある。知的能力とは別に感情に関する能力、すなわち感情知性がある。この感情知性こそがわれわれの本来持っている能力を最大限に発揮する上で重要な役割を果たすことが明らかになり、大きな関心を集めるに至った (e. g., Goleman, 1995; Salovey & Mayer, 1990)。

この二つの異なった知性、いわば考える知性と感じる知性は、どちらもわれわれにとって必要不可欠であり、相互補完的である。例えば、Damasio (1994) によれば、われわれの意思決定は必ずしも理性的なものではなく、感情の影響を受けているという。何らかの意思決定を迫られた場合には、全ての可能性を一つずつ吟味するといった合理的な方略をとるのではなく、過去の感情的な経験から接近すべきものに注意を絞ったり、あるいは回避すべきものを除外したりして、特定の選択肢を限定する過程が介在する。そのため効率良く選択することができる。

われわれの能力は多くの種類の能力から構成されるということは、Saloveyら以前からも唱えられてきた。実際、感情知性は、知性を多様な側面から捉えようとする、Gardnerの多重知性論 (multiple intelligences) の個人的知性 (personal intelligence) からの発想である (Mayer, 2000)。自分の感情を適切に認識・調整・利用することも知性の一部であるというように知性を多面的に、そして社会的な技能に含まれるというように実質的に捉えることで、従来は性格であるとか気質であるとか、うまれつきのもので固定的に見なされてきたことが、開発・教育・育成していくことができるという見方で捉えることが

可能になった。

そして、1990年代後半に注目を集めた最大の理由は、感情知性と人生の満足度や成功度とが密接な関係にあると考えられる。きっかけは、成功を収めた企業のトップやリーダーや、他者から多大な信頼を得ている人は、必ずしもIQの高い人ではないことであった。IQの高いいわば頭の良い人が、良い学校へ行き、良い会社へ行き、良い人生を歩むのだから、自分の人生に満足であったり、成功したと確信している成功者になりうるはずである。しかし、実際はこの考え方が正しいわけではない。例えば、あまり成績の良くなかった人が社会に出てから活躍をしている。逆に、成績優秀だった人が、人間関係を適切にこなせずに、本来の能力を十分に発揮できない。人生における成功度はIQで測定できない能力に依存する事例がまわりに幾らでもあったのだ。

感情知性が高い人は、自分を理解し、他人を理解する能力が高いことから、良好な人間関係を形成・維持するよう行動することができるため、周囲の人からの援助を受けたり、社会的な支援を活用して目標を達成したり等、それだけ人生において成功する可能性が高いと考えられた。それゆえ、感情知性を重要視する見方が高まり、感情知性を伸ばす必要性が声高に叫ばれるようになった。

感情知性の尺度化

感情知性を伸ばすためには、まず現在の感情知性を正しく測定することによって、感情知性を認識することが必要とされ、自己報告 (self-report) テスト、観察者評定 (observer ratings) テスト、パフォーマンス (performance) テストの、3種類のテストの作成が試みられている (Ciarrochi, Chan, Caputi, Roberts, 2001; Mayer, 2001)。

自己報告テストは、質問紙の形式で、「あなたは表情をどの程度うまく読み取ることができますか」のような複数の質問項目に対して、個人に主観的に判断・評価させる。混在型アプローチのように、感情知性を複数の人格特性から構成されると考える立場で多く用いられ、感情知性は特定的人格特性をどの程度備えているのか、各人格特性が普通以上のレベルかどうか、各人格特性の全

体的なバランスはどうか依存するとみなす。

観察者評定テストは、「(被検査者は) 表情をどの程度うまく読み取ることができると思いますか」のような複数の質問項目に対して、例えば親や上司など、個人に普段よく接し個人をよく知る第三者に主観的に判断・評価させる。

一方、パフォーマンステストは、ある人物の写真を見せて、その人物の表情が表す感情を答えさせたり、ある人物が描かれた短い物語を読んで、その人物の立場だったらどんな感情を抱くかを答えさせたりする。あらかじめ決められた得点基準があるという意味で客観的に評価できることが、自己報告テストや観察者評価テストのような質問紙とは異なる。能力型アプローチのように、感情知性を感情の認識に関わる能力であるとする立場では、感情知性は数字で表されたり計量されたりするものではなく、特定の問題や課題に対する答え方、すなわちパフォーマンスに反映されるものとみなす。

感情知性の尺度化の問題は、感情知性をどのように捉えるかに関わる。つまり、感情知性の定義により測定する尺度は異なる。その意味で感情知性には単一の尺度があるのではない。研究者によってその尺度や指標は異なると言えよう。しかし、感情知性の構造として、自己の感情に関する側面と他者の感情に関する側面、そして自己と他者との相互作用あるいは状況に関する側面の、3つの領域があることは、一致した見解になっている。日本で用いられている感情知性尺度についても同様である。

例えば、EQI (EQ Japan) では、自分で自分の状態がわかる心的知性 (セルフ・コンセプト)、他者に適切かつ効率的に働きかけることができる対人関係知性 (ソーシャル・スキル)、自分と他者の両者の状態を同時に認知できる状況判断知性 (モニタリング能力) の3領域があり、この3領域に含まれる24の素養 (人格特性) を表す合計250質問項目から構成される。この3つの知性をそれぞれどの程度備えているか、及び3つの知性のバランスがどの程度良いかということで感情知性の高さが決まるとする。

EQS (内山・島井・宇津木・大竹、2001a,b) は、内山のEQテスト試案を発展させるかたちで、日本独自の感情知性尺度を作成することを目指した。EQS

では、自己対応、対人対応、状況対応の3領域を設け、それぞれの領域に、対応概念として対応因子を各3つずつ計9つを設定している。更に、これらの下位概念として、情動的・認知的・行動的の3側面を考慮して、2つあるいは3つの下位因子を定義している。この計21の下位因子にそれぞれ3項目、回答信頼性傾向の基準である2項目を含め、合計65項目から構成される。各下位因子の得点に基づいて、自分の感情知性の構造を把握し、どのような能力が高い水準にあるのか、どのような能力を向上させる必要があるのか等、自己理解の手助けとして用いるべきとする。

EQテスト（大村、1997）では、Goleman（1995）が指摘した感情知性を構成する5つの要素に基づき、共感性、自己認知力、自己統制力、粘り強さ、柔軟性、楽観性の6つのサブテストから構成される。これらのサブテストは、それぞれ、諾否テスト20問、二者択一テスト10問、四者択一テスト5問の三種のテスト合計210問からなる。このサブテストの得点を指数に換算し、それを7レベルにランクづけし、レーダーチャート方式のダイヤグラムを描くことで、全体としてのバランスを判定する。また各サブテストの指数を平均することで、全体としての感情知性を算出する。

これらのテストでは、質問項目が多く、測定実施に時間がかかるという難点がある。そのため、質問紙に答えることのみが目的となっており、他の人格特性や行動様式との関係を検討していない、感情知性測定の信頼性や妥当性に関する実証的研究が少ない（Ciarrochi, Chan, & Caputi, 2000）という問題点がある。

人生において成功する人とそうでない人がいるのはなぜか。誰からにも好かれて、必要なときに救いの手を差し伸べてもらえる人はそうでない人と何が違うのか。些細なことでつまずいて人生を台無しにしてしまわないためにはどうしたらいいのか。このようなわれわれが素朴に持つ疑問に答えるには、感情知性との関係を吟味しなくてはならないものの、質問項目が多く実施に時間と労力がかかる質問紙尺度は扱いづらい。それゆえ、感情知性を簡易的に測定するための質問紙尺度を作成する意義があると考えられる。

感情知性に関する知見を今後積み重ねるためにも、比較的短時間で回答可能な、適用できる利便性の高い、感情認識能力の個人差を測定する、感情知性尺度の開発が必要である。そこで本研究では、感情知性を感情を認識する能力と定義した上で、感情知性を測定する簡便な尺度を作成することを試みる。

目的

Mayer, Caruso, and Salovey (2000) に基づき、感情知性尺度を作成する。彼らによれば、感情知性とは、様々な感情の意味やその関係を認識し、それらに基づいて推測したり問題解決したりする能力を指す。具体的には、感情を知覚・表出する能力、思考の助けとなるよう感情を同化する能力、感情を理解する能力、感情を思慮深く管理・調整する能力の4領域からなると仮定されている。

しかしながら、感情同化と感情理解が実際に分離されにくいこと、類似する領域であることから、本研究では、感情の知覚・感情の理解・感情の調整の3領域を仮定し、因子的妥当性及び信頼性の検証を行う。

方法

データの収集 調査は、女子大学生141名に対して実施した。被験者の年齢は、18歳から19歳までであった。調査は授業時間内に集団で行われた。質問紙は、自己記入式で、記名式であった。被験者には、質問紙を配布し、回答を記入させた後、直ちに回収した。

質問紙 感情の知覚、感情の理解、感情の調整の3領域ごとに、自己、他者、状況の3下位領域があった。これは前述の通り、感情知性の構造として、自己の感情に関する側面と他者の感情に関する側面、状況に関する側面の、3つの領域があると仮定できたからである。MayerやSaloveyらの理論に基づき(Mayer & Salovey, 1993,1997; Mayer, Caruso, & Salovey, 2000; Mayer, Salovey, & Caruso, 2000; Salovey & Mayer, 1990)、Table 1に示す通り、計24質問項目を作成した。各項目について、4件法(ほとんどあてはまらない、ややあてはまらない、少しあてはまる、かなりあてはまる)で評定した。各項目

の得点は1 - 4点として得点化した。得点が高いほど各項目に該当することを表す。

手続き 「感情の認識能力を測定する質問紙を作成するための予備調査の実施」が、本調査の目的であることを教示した。調査の開始時に、結果は統計的に処理し、個人の回答のみを問題にしたり、公表したりしないこと、「正しい答え」や「望ましい答え」というものは無いことを併せて強調した。

Table 1 感情知性尺度の因子分析結果

番号	質問項目	因子		
		調整	理解	知覚
c22	自分が他人からどう思われているか関心がなく、気にならない*	-0.810	0.021	0.034
c21	他人の目から自分がどう映るのか気になる	0.808	0.027	0.047
c32	自分に関する評価や噂に気を配る	0.676	-0.001	0.268
c12	人前で非難されたり腹が立つようなことを言われると、動揺する	0.490	0.094	-0.117
b31	まわりの人の感情につられて、嬉しくなったり悲しくなったりする	-0.074	0.846	-0.087
b21	他人が体験したことに、同情しやすい	-0.063	0.621	0.098
b11	自分が体験したり見聞きしたことに感動しやすい	0.087	0.484	-0.002
b33	まわり人の影響を受けて、一緒に気持ちが揺さぶられる	0.206	0.482	-0.042
a12	表情は豊かである	0.051	0.383	-0.033
a23	人の話を聞くのが好き	-0.096	0.369	0.160
b22	相手の話を聞き、相手の立場になって話の内容を理解する	-0.214	0.313	0.451
a22	相手がどんな気持ちか、隠している真意は何かを読みとろうとする	0.106	-0.064	0.655
a31	場の雰囲気を読み取ることができる	-0.101	-0.101	0.616
a21	相手の言葉のニュアンスや表情、身振りなどに気を配る	0.116	0.173	0.517
c31	周囲の期待に沿った行動をする	0.177	-0.027	0.363
b12	いつも自分の感情を理解しようとしている	0.176	-0.032	0.273
a11	自分の心の状態や動きをつかんでいたい	0.189	-0.055	0.060
c11	予測せぬ事態で冷静さを失って取り乱したりする*	0.203	0.274	-0.280

結果と考察

まず、全質問項目の記述統計量を算出した。次に、探索的因子分析を行い、最終的な項目選択した。その結果得られた因子得点を観測変数とみなし、高次因子分析を行った。そして、得られた潜在因子間の因果モデルを作成し、検証的因子分析を行い、妥当性を検討した。最後に、 α 係数を算出し、内的整合性を満たした尺度であることを確認した。

偏向性の分析 各質問項目の記述統計量（平均値・標準偏差・歪度・尖度）を算出した。歪度・尖度が高い項目がなかったことから、分布が極端に偏っていないことを確認した。

G-P分析 得点の平均値を利用してG-P分析を行った。a32、b23、b32以外の全ての項目において、上位群が下位群よりも平均値が有意に高かった。この3項目は以下の分析から除外した。各項目と全体との相関は全項目で有意であった。

探索的因子分析 まず、感情知性尺度の因子パターンを検証するために、因子分析（最尤法）をした結果、固有値1.0以上の3因子を抽出した。以下の因子の解釈に従い、これを、感情知覚、感情理解、感情調整とした。プロマックス回転後の因子パターンはTable 1に示す通りであった。

因子負荷量の絶対値.40以上を示した項目の内容を参考に、各因子を解釈した。

まず、因子Iに対して、項目c21「他人の目から自分がどう映るのか気になる」と項目c32「自分に関する評価や噂に気を配る」がプラスの負荷を示していた。両項目とも、他者やまわりの評価を意識した上で、自分の感情的行動を統制・調整するような内容であった。項目c22「自分が他人からどう思われているか関心がなく、気にならない」は反転項目のため因子Iにマイナスの負荷を示していたが、この項目c22は項目c21と同様、他者の評価に基づいて自分の感情の調整をするという内容であった。また、項目c12「人前で非難されたり腹が立つようなことを言われると、動揺する」がプラスの負荷を示しており、自分の感情の変動を意識した上で、自分の感情的行動を統制・調整する必要があると感じているという内容であった。このことから、因子Iは、感情を調整しようとするかどうかに関連する因子であると解釈し、「感情調整」因子と命名した。

次に、因子IIに対して、項目b21「他人が体験したことに、同情しやすい」と項目b31「まわりの人の感情につられて、嬉しくなったり悲しくなったりする」がプラスの負荷を示していた。両項目は、他者やまわりの感情と同じ様な感情になりやすいという内容であった。また、項目b11「自分が体験したり見聞きしたことに感動しやすい」がプラスの負荷を示しており、自分の体験を熟慮し理解することによって、特定の感情が喚起されやすいという内容であった。

そこで、因子IIは感情を理解しようとするかどうかに関連すると解釈し、「感情理解」因子と命名した。

最後に、因子IIIに対して、項目a22「相手がどんな気持ちか、隠している真意は何かを読みとろうとする」、項目a31「場の雰囲気を読み取ることができる」、項目a21「言葉のニュアンスや表情、身振りなどに気を配る」がプラスの負荷を示していた。これらの項目は、自分や相手、状況を理解するために、自分や相手、状況が示す感情的な手がかり（表情などの非言語的なメッセージ）を知覚しようとする内容であった。そこで、因子IIIは感情を知覚しようとするかどうかに関連すると解釈し、「感情知覚」因子と命名した。

高次因子分析 各因子3項目を決定した。感情知覚ではa21,a22,a31の3項目、感情理解ではb11,b21,b31の3項目、感情調整（c12,c22,c32）の3項目であった。更に高次因子分析（主因法）を行なった結果、固有値1.0以上の1因子を抽出した。

検証的因子分析 共分散構造分析（Amos4.0）を用いて分析した。ここで、探索的因子分析と高次因子分析との結果に基づき、「感情知性」は「感情知覚」「感情理解」「感情調整」の3つの潜在変数で間接的に測定されると仮定した。分析結果から得られた主な適合度指標の値は以下の通りであった。 $\chi^2=38.76$ (df=24,p<.03)、GFI=0.941、AGFI=0.890、RMSEA=0.066、AIC=80.760。

内的一貫信頼性 各因子について信頼性分析（Cronbachの α 係数）を行った。

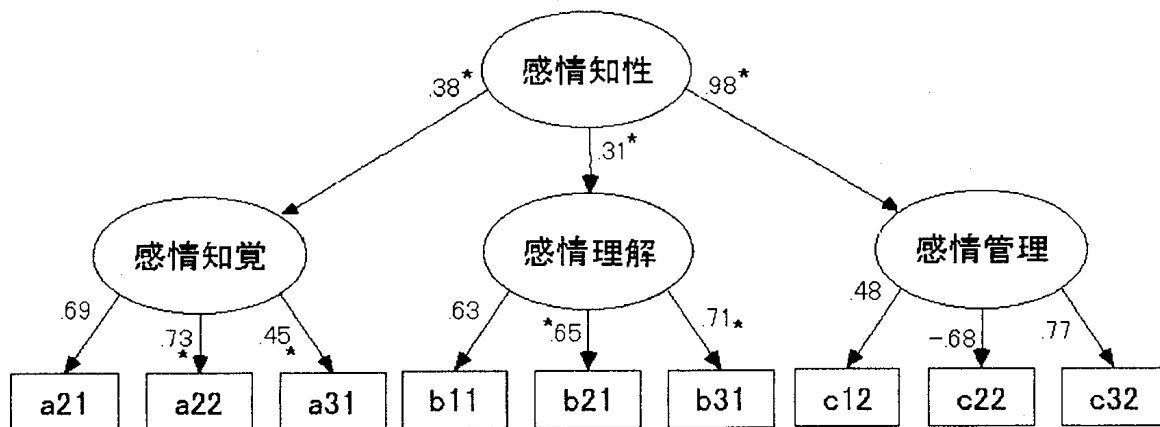


Figure 1 感情知性モデル（標準化解）

感情知覚では $a = .650$ 、感情理解では $a = .703$ 、感情調整では $a = .620$ 、感情知性では $a = .555$ であった。信頼性係数は比較的高かったことから、内的整合性を十分に満たした信頼性の高い尺度であることが示された。

総合考察

本研究では、感情知性を感情の認識能力として位置付けるという、Mayer et al. (2000) に基づき、簡略版の感情知性尺度を作成した。具体的には、(a) 感情を知覚する能力 (感情知覚)、(b) 思考の助けとなるよう感情を同化・理解する能力 (感情理解)、(c) 感情を思慮深く管理・調整する能力 (感情調整) の3つの領域を仮定し、因子的妥当性及び信頼性の検証を行った。その結果、感情知性は3因子構造で更に高次の1因子にまとめることができ、因子的妥当性が高いこと、内的一貫信頼性の高い尺度であることが示された。

しかしながら、この尺度には幾つかの問題点があり、(a) 質問項目の吟味、(b) 異なる被験者による検討が必要である。

まず、「感情調整」を構成する質問項目を再検討する必要がある。例えば、「他人による自分の評価を気にして動揺する」という内容の項目は、単に公的自己意識を測定しているだけであり、特定の感情を受け入れた上で感情のコントロールをするという「感情調整」には直接該当しないと指摘することもできる。それゆえ、質問項目の再選定・構成概念妥当性の吟味のために、既存の感情知性尺度との関係を検討することが必要である。具体的には、既存の感情知性尺度 (e.g., Shutte, Malouff, Hall, Haggerty, Cooper, Golden, & Dornheim, 1998) から、「感情調整」を構成する質問項目を選定し、併せて構成概念妥当性を検討しなければならない。

次に、異なる被験者に協力を仰ぎ、感情知性尺度の一般化を検討する必要がある。本研究の被験者は女子大学生のみであったため、男性、様々な年代の被験者に適用し、比較検討しなければならない。

今後の展望

今後の展望として、(a) 心的能力概念に伴う人格特性との関連、(b) 人生満足度や成功度、幸福感との関連、(c) パフォーマンステスト、様々な感情の認識に関わる認知課題との関係を吟味したい。

まず、感情知性がどのような人格特性と関連があるのか、検討する必要がある。例えば、共感性は、他者が感じていることを他者の立場で理解することであるから、共感性と感情知性とは高い相関があると考えられる。一方、感受性あるいは被影響性は、他者の感情につられて楽しくなったり悲しくなったりするなど、他者の感情的な変化や反応に影響を受けて自分にも感情的な変化や行動を引き起こされてしまうことであるから、感受性や被影響性と感情知性とは必ずしも高い相関がないと考えられる。なぜなら、感情変化に敏感であるのは感情知性が高いと言えるが、感情的な反応を調整できないという意味で感情知性が高いとは言えないからである。このように、感情知性と高い相関があると想定できる人格特性だけではなく、感情知性と高い相関があるとは想定できない人格特性についても調べるべきであろう。

次に、感情知性が人生満足度や成功度、主観的幸福感とどの程度高い相関があるのか、またそれはなぜかを検討する必要がある。例えばCiarrochi et al., (2000) によれば、感情知性の高い人は低い人よりも、ユーモラスな映画を視聴した後にポジティブな感情状態を報告したのに対し、癌で死ぬことに関する映画を視聴した後にネガティブな感情状態を報告はしなかった。また、Smith and Petty (1995) によれば、自己に対するポジティブな評価の高い人は、ネガティブな状況であってもネガティブな感情の表出を抑えたり、ポジティブな思考をすることでポジティブな感情を回復したりするというように、自分の感情をコントロールすることができる。すなわち、感情知性の高い人は、ポジティブな感情のレベルが高いため、肯定的な思考により好ましい自己評価をする。また、感情知性の高い人は、ネガティブな感情を引き起こす状況に対する耐性が高いため、それらの影響を最小限にすることによって、適切に対応すること

ができる。このような自己・他者・状況に対するポジティブな感情・評価の維持は、主観的幸福感の維持に役立つ。

そして、主観的な自己報告テストで測定された感情知性が、より客観的なパフォーマンステストに反映されるのかを検討する必要がある。MayerやSaloveyは、感情知性はパフォーマンステストによってのみ測定されるべきとし、MEIS (Multifactor Emotional Intelligence Scale) やMSCEIT (Mayer-Salovey-Caruso Emotional Intelligence Test) を開発している (Mayer, 2000, 2001)。これらのテストと同様に、感情知覚・感情理解・感情調整を測定するパフォーマンステストを作成し、その信頼性および妥当性を検討することが求められる。これに加え、特定の感情価を持つ情報の認識を調べる認知課題 (例えば情動ストループ課題等) における個人差についても検討するべきであろう。同時にこれらのパフォーマンステストや認知課題と、自己報告式の質問紙との関係、人格特性との関係を調べることで、感情認識能力を構成する要素は何か、それらはどのように構成されているのか、明らかにすることができる。

おわりに

感情知性が近年社会的に注目を集めているのは、感情を適切に知覚・理解・調整することも知能の一部とみなすことで、知能を多面的に捉えているからである。実際に、自分や他人の感情を認識し、その感情に対処する能力が、社会で生じる様々な問題に直面したときに、重要な役割を果たすことが示されている (e.g., Goleman, 1995; Salovey & Mayer, 1990)。この感情の認識能力としての感情知性は、未だ新しい概念であるため、定義や測定法の問題など検討すべき問題が多い。しかしながら、感情知性の構造や機能に関する実証的研究は、教育・ビジネス・臨床など様々な分野への応用可能性を秘めている (e.g., Goleman, 1995, 1998, 2002) という点で、研究意義を持つ。自分や他者の感情を適切に認識し、相手に伝達するための、対人コミュニケーションにおける効果的な感情認知・感情認識のあり方について考えることは、温かい対人関係を

築き、発展させ、それを維持するといった、他者との関係を円滑に進めることのできる社会的な技能の解明に大きく貢献できるであろう。

引用文献

- Bar-On, R. 2000 Emotional and social intelligence: Insights from the Emotional Quotient inventory (EQ-i). In R. Bar-On & J.D.A.Parker (Eds.), *Handbook of emotional intelligence*, Pp. 363-388. San Francisco: Jossey-Bass.
- Ciarrochi, J. V., Chan, A. Y. C., & Caputi, P. 2000 A critical evaluation of the emotional intelligence construct. *Personality and Individual Differences*, 28, 539-561.
- Ciarrochi, J. V., Chan, A. Y. C., Caputi, P., & Roberts, R. 2001 Measuring emotional intelligence. In J. V. Ciarrochi, J. P. Forgas, & J. D. Mayer (Eds.), *Emotional intelligence in everyday life: A scientific inquiry*, Pp.25-45. Hove, UK: Psychology Press.
- Damasio, A. R. 1994 *Descartes' error: Emotion, reason, and the human brain*. New York: William Morris Agency, Inc. 田中三彦訳 生存する脳：心と脳と身体の神秘 講談社。
- Goleman, D. 1995 *Emotional intelligence*. New York: Bantam. 土屋京子訳 EQこころの知能指数 講談社。
- Goleman, D. 1998 *Working with emotional intelligence*. New York: Bantam. 梅津祐良訳 ビジネスEQ 東洋経済新報社。
- Goleman, D., Boyatzis, R., & McKee, A. 2002 *Primal leadership: Realizing the power of emotional intelligence*. Boston: Harvard Business Press. 土屋京子訳 EQリーダーシップ 日本経済新聞社。
- Mayer, J. D. 2000 Emotion, intelligence, and emotional intelligence. In J. P. Forgas (Ed.), *Handbook of affect and social cognition*, Pp.410-431. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

- Mayer, J. D. 2001 A field guide to emotional intelligence. In J. V. Ciarrochi, J. P. Forgas, & J. D. Mayer (Ed.), *Emotional intelligence in everyday life: A scientific inquiry*, Pp.3-24. Hove, UK: Psychology Press.
- Mayer, J. D., Caruso, D. R., & Salovey, P. 2000 Emotional intelligence meets traditional standards for an intelligence. *Intelligence*, 27, 267-298.
- Mayer, J. D. & Salovey, P. 1993 The intelligence of emotional intelligence. *Intelligence*, 17, 433-442.
- Mayer, J. D. & Salovey, P. 1997 What is emotional intelligence? In P. Salovey & D. J. Sluyter (Eds.), *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications*. New York: Basic Books.
- Mayer, J. D., Salovey, P., & Caruso, D. R. 2000 Models of emotional intelligence. In R. J. Sternberg (Ed.), *Handbook of intelligence*, Pp.396-420. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 大村政男 1997 ずばり診断!EQテスト 現代書林。
- Salovey, P. & Mayer, J. D. 1990 Emotional intelligence. *Imagination, Cognition, and Personality*, 9, 185-211. (In J. M. Jenkins, K. Oatley, & N. L. Stein (Eds.), *Human emotions: A reader*, pp.313-319. Blackwell Publishers.)
- Schutte, Malouff, Hall, Haggerty, Cooper, Golden, & Dornheim, 1998 Development and validation of a measure of emotional intelligence. *Personality and individual Differences*, 25, 167-177.
- Smith, S. M. & Petty, R. E. 1995 Personality moderators of mood congruency effects on cognition: The role of self-esteem and negative mood regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 1092-1107.
- 内山喜久雄・島井哲志・宇津木成介・大竹恵子 2001a EQS (エクス) 実務教育出版。
- 内山喜久雄・島井哲志・宇津木成介・大竹恵子 2001b EQS (エクス) マニュアル 実務教育出版。

吉川左紀子・伊藤美加 2001 感情の理論 中島義明（編） 現代心理学理論
辞典 Pp. 347-365 朝倉書店。